

教室における intonation の実際について

根内 喜功

1 はじめに

教室における教師と生徒の interaction は一種独特である。普通、教室での interaction は、教師があらかじめ答を知っている質問を生徒に問うことで始まり、生徒はそれに答え、再び教師がその答を評価する (Nunan, 1993)。

Sinclair & Brazil (1982)では、教室での interaction は次のように定式化されている。

initiation
response
follow-up

教室では initiation、response、follow-up というパタンが特徴的であり、たいていの場合それが繰り返されるのである。たとえば、

T: Who's that? (initiation)
S: John. (response)
T: Good. (follow-up) (ibid)

本稿では、英語授業における教師と生徒間のやりとりの中で intonation がどのような特徴をもつのか、initiation、response、follow-up のそれぞれについて現実のデータを基に考察する。

2 intonation について

intonation とは何か捉えるためにまず、その定義が必要である。いくつか定義がなされているがどれも一様ではない。以下の定義を参考に見よう。

- The movement of the voice up and down in speaking. (Vernon: 1970, p61)
- ...the words do not change their meaning but the tune we use adds something to the words, and what it adds is the speaker's feelings at that moment ; this

way of using tunes is called intonation. (O'Connor:1980, p.108)

- Stress and intonation give rhythm and melody to our speech. Intonation creates the melody. ... Intonation also expresses feelings: happiness, curiosity, surprise, annoyance, and so on. (Orion:1987, p.45).
- ... variations of pitch may be related to relatively long stretches of speech which may be many syllables in length, and which correspond to relatively large grammatical units such as the sentence. Pitch variation used in this way is called intonation. (Catford:1994, p.183)
- ... we spoke of intonation as variation in the musical pitch of the speaking voice. (Sinclair and Brazil:1982, p.101)


上記の定義はいくつかの key words を与えてくれる。Intonation は 'movement of the voice' であり、'variations of pitch' である。それは 'musical pitch of the speaking voice' であり 'give rhythm and melody to our speech' つまり、'melody' のようなものである。そして、言葉の持つ意味自体は変わらないが話者の感情や態度を示すものである。したがって、このように intonation を定義する。

Intonation is the movement of the voice (pitch), and something like a melody. Sometimes it goes up and down. Intonation comes out when we speak. In short, intonation is the movement of the voice (pitch) like a melody going up and down.

intonation は話者の感情や態度などを表わす機能を持ち、英語におけるコミュニケーションで重要な役割を担っている。しかし、同時に複雑さを呈している。これは intonation のパターンを見れば理解できるであろう。例えば次のようなパターンが認められている。


(1) (a) The falling tune (the Glide-Down)

What's that?



(b) The first rising tune (the Glide-Up)

Are you married?



(c) The second rising tune (the Take-Off)

I was trying ↗

(d) The falling-rising tune (the Dive)

That was nice. ↘ ↗

(O'Connor, 1980)

(2) (a) Rising-Falling Intonation

What's the matter? ↗ ↘

(b) Rising Intonation

Is she at home? ↗

(Prator & Robinett, 1985)

(3) (a) Gradually Falling Tune

How nice! ↘

(b) Gradually Rising Tune

Are you sure ↗ that was your father? ↗

(c) Falling Rising Tune

We'll be all right. ↘ ↗

(d) Level Tune → →

Go on.

(e) High Downglide

It's up to you. ↘

(f) Suspended Tune


Come in. →

(阿倍, 1963)

(4) (a) Falling Intonation


I don't like it. ↘

(b) Rising Intonation

Do you like ~~it~~ 

(Orion, 1987)

上述の(2)に注目してもらいたい。(1)から(4)の中で(2)のみ falling が示されていない。(2a)に示されているのは falling ではなく rising-falling である。しかしながら、(1)から(4)それぞれ(a)の intonation はどれも falling で終わっている。intonation が rising や falling になるかは強勢のある音節と関係がある。しかも、たいていの場合は sentence の一番最後にくる強勢をもつ単語に注目してそこで rising であるとか falling であるとか議論するのである。たとえば、(2a)は場合によっては次のように表記されるであろう。(大文字は強勢のある音節を表す。)

(2a') WHAT's the MATter ? 

sentence の一番最後にくる強勢をもつ単語 すなわち、matter に注目するならばその中で強勢のある音節である mat-で intonation が falling になると考えられるので上記のように表記できる。したがって、(2a)と(2a')は全く同じものである。


また、(1b)のようなパタンもあるが考え様によっては(1c)、(2b)、(3b)、(4b)とおなじパタンであるといえる。したがって、基本的なパタンとしていかのものを挙げることができる。

rising


falling

falling-rising

では上記の3つのパタンは普通どのような場合に使われるのだろうか。概略的に以下に示す。

(5) Can I see ~~it~~ 

(O'Connor, 1980)

(6) I like it very ~~much~~ 

Why did you change your mind?

Take your feet off the chair.

What a very pretty dress! (ibid)

(7) She took the car (and drove to London).

He's generous (but I don't trust him). (ibid)

(5)のように rising intonation は普通 yes-no 疑問文で使われる。また、(6)のように falling intonation は普通、陳述が完結したことを示し WH 疑問文や命令文、感嘆文等などに使われる。WH 疑問文や命令文では rising intonation が使われることもあるが、その場合 WH 疑問文は相手に対して興味や関心が強いことを意味し、命令文は命令を和らげることになる。(7) に見るように、falling-rising intonation は陳述が完結せずあとに言葉が続くことを意味する。

3 intonation の実際

3.1 initiation

Japanese Teacher of English (以下 JTE とする) の場合 initiation のほとんどが疑問文のかたちでなされる。したがって、そのほとんどが rising intonation または、falling intonation である。(以下、大文字は強勢のある音節を表し矢印は falling intonation を、↗ は rising intonation を、↘ は falling-rising intonation をそれぞれ指す。)JTE の発話例をいくつか見てみよう。

(8) (a) WHAT'S your FAVORITE ANIMAL?


(b) WHEN is your BIRTHDAY?


(c) HOW LONG are you GOING to STAY?

(9) (a) Do you HAVE any PETS?


(b) Can you EAT Natto?

はじめの3つはいわゆる WH-question で falling intonation が普通であり、残りの2つは yes-no question であるから rising intonation であるのはすぐに納得がいくであろう。しかしながら、興味深い発話がいくつか認められた。

(10) How long are you going to stay? 

(11) Can you eat *natto*? 

(10)はある程度高い位置から声が始まり平たんにピッチが流れていく。この平たんなピッチの流れはしばしば認められた。これが日本人ゆえの現象、発話者の癖であるといえ、全くそれを否定することはできないがピッチが平たんになる現象は授業の終盤に頻繁にみとめられた。さらに全く同様の発話を何度も繰り返して生徒に対して行っていた。したがって単調な繰り返しの作業が心理的に影響しピッチが平たんになったとも考えられる。また、同様の文で次のような intonation もみとめられた。

(12) How long are you going to STAY? 

平坦にピッチが流れていく点では先に挙げたものと同様だが最後に強勢のある stay でピッチが上昇している。文の最後にだけ注目すれば一種の rising intonation とみなすこともできる。

仮に、一つの授業を時間で二つに区切るとするならば、こうした rising intonation は授業の前半によく使われる傾向が見受けられる。一方授業後半は(10)のように平たんな intonation が見受けられる。

授業を時間的流れに沿って intonation を考察する時、もう一つ興味深いことが認められた。普通、授業では始まりと終わりの挨拶をする。その二つを比較してみると同じ挨拶ながら JTE のもちいた intonation は異なっていた。


(13) (a) Good MORNING, EVERYONE! 

(b) Good-BY, EVERYONE. 

(13a)で everyone の部分は rising intonation がとられている。この場合 falling intonation をとっている (13b) に比べると聞き手に対する親しみがより込め


られていると考えられる。intonation は発話のコンテキストに依拠するところがあるため一概にはいえないが、(13a) と (13b) の間にはひょっとしたら発話者の心理的差異があるのかもしれない。

ここで (11) にもどってみよう。(11) は natto のはじめの音節から falling intonation になっている。この場合 natto のはじめの音節に強勢を置いたからだと考えられる。次の2つを比較してみよう。

Can you eat NATto?

 Can you eat natto?

もっとも後にくるの単語の最後の音節に強勢が置かれると rising intonation になり、その単語のはじめの音節に強勢が置かれると falling intonation になっているのである。日本語はピッチではなく強勢によってメリハリをつける。そのため強勢の置かれぬ音節ではつられてピッチが下がったと考えられる。


yes-no 疑問文が falling intonation をとる場合発話者は聞き手に答えを強制することになる。教室の場合教師の発話は intonation 次第で生徒の応答に影響を与えるのである。例えば Can you eat natto? の場合、「納豆食べられるよな。食べられないわけがない。」となり、その答えは yes が期待される。しかしながら実際の発話はこうであった。

T : Can you eat NATto?
 S : No.


生徒は intonation を無視し、「Can you～」というフレーズによって疑問文だと判断し応答したに過ぎないのかもしれない。

3.2 response

前節で見たように生徒の応答は教師の intonation 影響する場合もありうるが現実には生徒の応答と教師の intonation はあまり関係がなく、生徒の応答はほぼ一貫して次のような intonation になる傾向がある。

(14) T : What's your favorite ANImal?
 S : Cats.


(15) T : What's the purpose of your VISIT?

S : Visiting relatives →

(16) T : Do you have any PEIS?

S : No. →

(14)から(16)のどれを見ても生徒が応答する時の intonation は平たんである。その原因は強勢が置かれるべき音節に強勢がないことである。したがって純粋な英語の intonation とはかけ離れたものになっているのである。

3.3 follow-up

前に述べたように、follow-up とは生徒の応答に対して教師が評価を加えることである。Sinclair & Brazil (1982)によると、教師の質問に対して生徒が得ないまたは誤った答えをした場合教師は次のような intonation を用いる。

S : and they kept sailing from Suez Until they reached India.

T : but India is EAST of SUEZ!

生徒の言葉をそのまま受け継いだところは falling-rising intonation が使われ、誤りを正している部分は falling intonation が使われているのである。一方、現実のデータを考察するとこのような例はまず認められない。中学校の英語の授業において教師が生徒に対し英語で質問をするのは答えが正しいかどうか評価するためではなくその英語の表現になれるためである場合が多い。したがって、生徒が応答することが出来れば教師は OK や good, very good、などと評価するのである。ゆえに、実際には次のような発話例が多く見受けられる。

T : What's your name?

S : [inaudible] →

T : OK. THANK you. GOOD job.

GOOD job は falling intonation になっているが OK と Thank you に関しては平たんな intonation になっている。OK や Thank you は日本語にも馴染みが

深いため intonation が日本語的になってしまったと考えられる。この場合日本語の感覚からすれば OK や Thank you には何ら特別の感情や態度が含まれているわけではなくむしろ事務的にさえ感じる。Thank you を例にとると、

- (17) (a) ~~THANK you.~~
 (b) ~~THANK you.~~

普通、深い感謝を表わす場合 falling intonation になるが、事務的に言う場合 rising intonation になる。例えばバスの乗客が料金を支払った時運転手は(17b)のように言う。なぜなら料金を支払うことは当然のことだからである。とはいえ、教師が生徒に質問し生徒が答えるのは当たり前のことだから事務的なのだとは言えない。

4. おわりに

本稿では中学校における英語の授業で用いられる英語の intonation には実際にどのような特徴があるのか現実のデータを基に考察した。これまで見てきた intonation の特徴が全てにおいてあてはまるとはいえない。日本人の英語の intonation を考える際難しいことはそれが日本語の癖と関係しているかもしれないということである。どんな intonation の特徴を捉えたとしてもそれが日本語の癖と関係しているならば、議論の余地がないのである。しかしながら、私が収集した実際のデータに限っていえばこれまで述べてきたような特徴があるといえる。

intonation の特徴についていえば教師、生徒どちらに関しても日本語の癖が原因であるところがあるかもしれない。特に生徒に関してはそれが強いように思える。これは intonation が現場でほとんど扱われていないということの現われであろう。

教師の intonation には大部分のところ、falling intonation と rising intonation が用いられている。授業では教師が生徒に指示を与える場合そのほとんどを日本語によって行う場合が多いからである。では英語はいつ使うのかと疑問に思うかもしれない。英語は生徒に英語の表現になれさせるための練習として使うことが多いのである。したがって、学校で学習する範囲内の英語を使うことがしばしばであるから、基本的な intonation のパターンである falling intonation と rising intonation がよく使われることとなる。

しかし、falling intonation や rising intonation だけではなく、実際には平たん

な intonation もみとめられた。いずれにせよ intonation というものが現場ではあまりふれられていないのが現実であろう。英語教育においてコミュニケーション能力の重要性が叫ばれる現在、現場において intonation が無視されるべきではない。むしろ力を入れるべきである。が、しかし実際はそうではないというのが英語教育の問題点の一つであるといえるだろう。最後に、言語教育における intonation の現実について述べた文章を引用して本稿を終わりたい。

It [intonation] is mostly ignored in language teaching, apart from the obligatory aside in NOTIONAL/FUNCTIONAL SYLLABUSES that functions are related to intonation. (Keith & Helen, 1998)

参考文献

- ・ 阿倍 勇. (1963). 英語イントネーションの研究. 研究社.
- ・ Coultherd, M. (1985). *An introduction to discourse analysis*. 2nd ed. ED. Candlin, C.N. Longman.
- ・ Gimson, A.C. (1975). *A practical course of English pronunciation: A perceptual approach*. Edward Arnold publishing Ltd.
- ・ Johnson, K. , & Johnson, H. (1998). *Encyclopedic dictionary of applied linguistics: A hand book for language teaching*. Blackwell publishers Ltd.
- ・ Nunan, D. (1993). *Introducing discourse analysis*. Ed. Carter, R. , & Nunun, D. Penguin.
- ・ O'Connor, J.D. (1980). *Better English pronunciation*. 2nd ed. Cambridge University Press.
- ・ Orion, Gertrude. F. (1987). *Pronouncing American English: Sound, stress, and, intonation*. Harper and Row publishers, Inc.
- ・ Prator, Jr. C. , & Robinet, B.W. (1985). *Manual of American English pronunciation*. 4th ed. Holt, Rinehart, and Winston, Inc.
- ・ Sinclair, J.M. , & Brazil, D. (1982). *Teacher talk*. Oxford University Press.

(岩手大学教育学部英語教育専修)